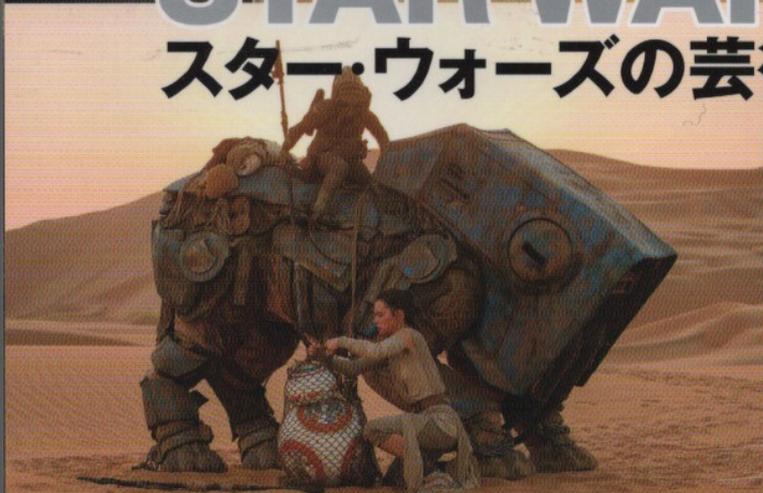


美術手帖

BT | 2015.12
vol.67 NO.1031

ART OF STAR WARS スター・ウォーズの芸術学

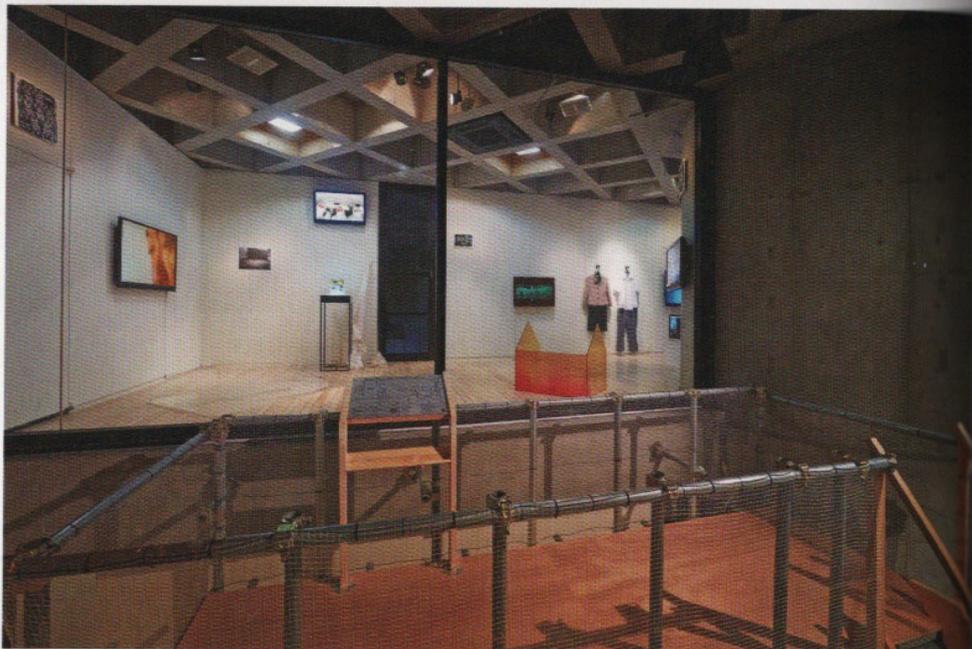


エピソード7
「フォースの覚醒」
ついに公開!
SF論、神話、デザイン、
VFX、音楽から分析
金氏徹平と行く
「スター・ウォーズ」展



菊畑茂久馬×榎木野衣
卯城竜太×黒瀬陽平
Artist Interview
中村政人





3点とも、ワタリウム美術館でのサテライト展示「Don't Follow the Wind Non-Visitor Center」の展示風景。撮影＝森田兼次
 上——3階の展示風景。参加作家による関連作品や資料が出品されている。観客は中には入れず、2階から狙まれた矢倉に登って、ガラス越しに内部を眺める
 左下——3階でエレベーターの扉が開くと、観客が入れないよう扉が立ち塞がる
 右下——4階の映画監督・周子温による映像インスタレーション。東京と海外2都市をつないで行われた作家らによる対談と、同時刻に記録した帰還困難区域の映像が映し出される

Don't Follow the Wind, Non-Visitor Center
 9月19日～11月3日 ワタリウム美術館

「Don't Follow the Wind」のサテライト展示。帰還困難区域内に設置された作品に関連した各作家の作品や資料、ドキュメントなどを展示する。今後、海外の美術館やアートセンターを巡回予定

Don't Follow the Wind
 3月11日～ 東京電力福島第一原発事故
 にもなう帰還困難区域内某4か所

東日本大震災から4年経った3月11日からスタートした、観に行くことができない展覧会。元住民から借りた様々な会場に12組の作家が作品を展示する。帰還困難区域の封鎖解除後、一般公開となる。
 参加作家＝艾未未(アイ・ウェイウェイ)、Chim1 Pom、グランギニョル未来、ニコラス・ハーシュ&ホルヘ・オテロ・バイロス、小泉明郎、エヴァ&フランコ・マッテス、宮永愛子、アーメット・ユエグ、トレヴァー・バグレン、タリン・サイモン、竹川宣彰、竹内公太
 キュレーター＝窪田研二、ジェyson・ウェイト、エヴァ&フランコ・マッテス
 発案＝Chim1Pom

2点とも、福島の帰還困難区域内での写真
 上——艾未未、Family Album '2015
 22枚の写真、インスタレーションサイズ可変
 艾が自身の家族やスタッフの写真をも、会場となる帰還困難区域内の民家の家族写真に紛れ込ませようとする作品
 下——トレヴァー・バグレン、Trinity Cube 2015
 帰還困難区域のガラス、トリニタイト
 20×20×20 cm
 人類初の核実験によって生まれた鉱物であるトリニタイトと、帰還困難区域にあったガラスを溶かし合わせたキューブ



「カオス*ラウンジ」新芸術祭2015

市街劇「怒りの日」

荒瀬陽平 画像の一本松 2015 福島物産館電線・ミクストメディア
 (映像提供=NHKクリエイティブ・ライブラリー・伊原悠) 撮影=中川誠

卯城竜太

Chim↑Pom

福島からもうひとつの × アートワールドをつくる

黒瀬陽平

カオス*ラウンジ

Chim↑Pom 発案による帰還困難区域での展覧会「Don't Follow The Wind」とサテライト展、そしてカオス*ラウンジ主催の「市街劇「怒りの日」」が開催されたこの秋、福島がアートの発信地として大きな注目を集めた。震災から4年、若手作家を中心とした新たな動向を探る。



「Don't Follow the Wind」

福島の前線困難区域にて、宇川直宏がデザインした旗と主催者たち
 Courtesy of Don't Follow the Wind

「みえな」を扱った2つの展覧会

本誌5月号「日本のアート最前線」特集では、初めて卯城さんと黒瀬さんに対談していただきました。取材した3月上旬は、卯城さんにとっては「Don't Follow The Wind」(以下DFW)の開催直前、黒瀬さんは「市街劇」怒りの日」の構想中というタイミングでした。その後3月11日からDFWが継続的に開催されるなか、この秋には東京のワタリウム美術館でDFWのサテライト展が開かれ、いわき市では「怒りの日」が開幕し、前回の対談時にお話されていたことがいよいよ具現化されたと思います。そこで今回、あらためてお二人のお話をうかがえればとこの場を設けました。

卯城 この間、福島でDFWの全体、4会場を初めて通して見てきたんだよね。それは、自分が思っていたアートの可能性を完全に上

回るものだった。死んでいた場所が生命力を吹き返して何かを主張しているような感じで、作品やキュレーションの持つ「アートの力」を強く感じた。実際の展示以外にも、そこに至る「プロセス」も特筆すべきものだった。とにかくトライアルだったけど、「もうひとつのアートワールド」が生まれた感じ？ 実行委員会の組織化や資金調達、現地や美術館、海外との提携に書籍の出版まで、通常のアーティストのフレージングとは違う有機的なつながりで形になった。

黒瀬 そこは「怒りの日」も同じで、助成金は一切もらっていません。地方で「芸術祭」と銘打つとどこから援助を受けたと思われるけど、市の商工会議所や市役所には挨拶すら行っていない(笑)。3つの会場と、少数の支援者の協力だけで実現したんです。

卯城 DIYな雰囲気がかすこくよかったです。それと比べて、行政からお金がポンッと降りる安パイ

断片があちこちに残っていて、そこからストーリーをつくったんです。それは震災の直後ではなく、月日経ってはお互に見つけた自分たちのテーマだった。

卯城 「怒りの日」とDFWの間軸の関係は面白いよね。前者は原発が生まれた近代以前の歴史を、後者は近代から封鎖が解ける未来までの問題を扱っている。

黒瀬 連続して見ることで、時間旅行ができる。

卯城 うん。Chim↑Pomは11年にジャーナリスティックな視点で活動したじゃん。タイトルも「Real Time」って「タイムス」とかにかけてたし。当時はその「現在」をすっば抜く感じが効果的だったけど、今はタイムスパンの長さに抽象的なリアリティーが必要だと思っ。俯瞰できるようになったから。さらに今回、いわきでは同時期に、毒山凡太郎+キynchヨメが「今日もきこえる」展を開いたでしょ。あれはよかった。DF



「Don't Follow the Wind」より
エヴァ&フランコ・マッテス
Fukushima Texture Pack(部分) 2015
プレキシガラス、ステンレス・スチール 100×70cm

Wは世界、「怒りの日」は福島出身以外の日本の若手、「今日もきこえる」は福島や常磐出身の作家のポテンシャルが活きていて、いろんな角度から俯瞰できた。

黒瀬 僕たちが共有していたものがあるとなれば、震災後からずっと続いている閉塞感なんだと思います。とくにいわきのような場所では、住民感情もすごく複雑でナイーブになっている。それをプレイクスルーするには、想像力を遠くに飛ばすことが必要だった。

卯城 想像力で言うと、DFWは「みに行けない」けど作品画像の公

な芸術祭には、作品やキュレーション次第だけど、個人的にはそこまでスリルや覚悟を感じない。

黒瀬 今、全国各地で乱立している芸術祭の多くは、もはや悪い意味で公共事業となってしまうてほとんど可能性がない。でも本来、地方での芸術祭という形式は、美術館やコマースギャラリーが機能しない日本のなかで、いかにアクチュアルで持続可能なアートを生み出すか、という問題意識のもとに、北川フラムさんや福武財団などが確立した新しいモデル

だったはず。だから今回、僕としては北川さんや直島のプロジェクトがやったことを更新してやろうという気持ちもあった。そのために、徹底的に土地のリサーチをはじめたんですが、面白かったのは途中から「時間の中で迷子になった」ことです。例えば、平安時代に最澄と論争していわきにやってきた名僧「徳」や、16世紀にいわきから琉球へ渡った袋中上人といったモチーフに出会ったことで、時間感覚が一気に掻き乱された。あの土地にはまだ彼らの「怒りの日」



黒瀬(左)と卯城(右)。美術出版社にて

開は各作家に任せているんだよね。で、海外からの6組はすべて画像を公開するけど、日本人は6組中5組が公開をNGにした。封鎖が解かれるまで作品を封印する作家と、より世界に情報を発信しようという作家の選択は、福島への距離感として興味深かった。

黒瀬 DFWが距離的な「みえなさ」を扱ったとすれば、僕らは時間的な「みえなさ」を扱った。両展とも可視と不可視の境界や関係性を、アーティストや鑑賞者が考えざるをえない場になっている。実

際に震災後、放射能はもちろん、補助金の有無など、目にみえない問題が分断を生んでいるわけです。そのような、震災後に新たに生まれた可視/不可視の境界線があるということ、アートによって指し示し、思考する場をつくらうとしたのが、今回の2つの展示だったように思います。

アーティストが新たな「アートの現場」をつくる

黒瀬 寺山修司から引いた「市街劇」という題の通り、「怒りの日」

本当のオルタナティブの入口であるはず。その上で、いかにその状態を維持していけるかという課題をクリアしなければいけない。僕たちはそれを地道にやっていきますけど、ただ、ずっと我々の孤軍奮闘だと悲しいですよ。

卯城 コレクターの問題もあるよね。困難な道こそ支えてほしい。DFWでいうと資金の多くはChim!Pomが作品を販売してつくったんだけど、でもそのうちのひとつは意外とやって面白かったよ。



海山凡太郎+キョウチヨメ展覧会「今日も きこえる」は、いわき市の「怒りの日」会場にほど近いノマドギャラリー・ナオナカムラで9月18~22日に開催。上はキョウチヨメの映像インスタレーション《ウンをつくった話》(2015)、下は展示風景

もう一方は「お焚き上げ」といって燃やしてしまう。2年間かけて丹念に磨いた壁を、です。「ここじゃない場所に置かれるのは違う」という判断なのですが、その炎は本当に感動的だった。

卯城 すこいね。まさに作品の完璧な完成形じゃん(笑)。モノとしての保存だけじゃない、作品の生き方があるんだよね。DFWの作品もどうなっていくかわからないけど(笑)。朽ちたり盗まれたり……だからみんなには想像し続けてほしい。作品や帰還困難区域は今どうなっているんだろうと。DFWは展覧会である以上何かを発信しているわけで、サテライト展やカタログで受信したオーディエンスの想像力を、今後ずっと試していくことになるんだろうと思う。とはいえみんな忘れっぽいから問題は風化するんだろうけど、でもそうならそれで仕方ない。人々の想像力からも捨てられたとき、あの場所の作品たちはマジで

だよ。うちの父親が徳島の山奥育ちなんだけど、その魔屋をバラして、古材にChim!Pomの11年の福島関係の作品イメージをシルクスクリーンとかで描いた。当時被災地で取り壊しが決まった民家にスプレーで描いてあった「x」も大きく描いた。帰還困難区域と限界集落の誰もいない感じがつながらって結構かつこよかった笑。

卯城 まあ、売れ残ってるよ(笑)。Chim!Pomのコレクターも多くなって、コレクターじゃない人へのアプローチも必要だったんだよね。つまり、コレクターには購買欲だけじゃない、ブレイヤーとしての欲というか、プロジェクトへの共犯関係を持ってほしい。黒瀬 それは僕らも同じ問題を抱えてますね。「怒りの日」の予算も、作品の売上と、カオスの他の活動

の収益を突っ込んでなんとか賄っているという状況です。商業ギャラリーでの展示にしか来ず、福島のような遠方での展示には来ないコレクターは結構いるんですが、むしろ「怒りの日」のようなチャレンジにこそ乗ってほしいし、共犯関係を結んでほしい。一方でアーティストも、コレクター向けに小さな作品ばかりつくっていいないで、そこからズレる試みをして、コレクターたちを「煽る」ようなこともやっていかないと。

卯城 モノではなくコトを創ることをアーティストも提案しないとね。そもそも未来のアーティストを考えると、今の「東京中心」「欧米が本場的な考えは、残るだろうけど古くなるよ。美術館の在り方も、ネットや地域とのコラボの拠点へと広がっていくと思う。つまり本場じゃなくて現場が大事になり、中心はどこにでもできるってこと。そしてそれは業界じゃない、社会をベースに起きるでしょ。

ネット上のリアルな場所や、歴史的に重要な土地や、世界の隅々や。今回の3つの展覧会は福島でそんな未来のアーティストの在り方を、世界に先んじて実践したのかも。

未来への継承

黒瀬 僕らは今後も福島で芸術祭を続けるし、来年は瀬戸内や静岡での展示も考えています。静岡のほうは丹那盆地で、そこには丹那断層という断層が走っている。伊豆半島って随所に活断層が走り、火山も噴火する、日本列島の縮図みたいな場所なんです。そこに劇場をつくらうと思ってる。誘ってくれたのは当地でChim! Edge Projectを展開するアーティストの住康平さんで、先日までやってきた半島の傷跡「展では、丹那断層を挟んで建つ二つの寺にそれぞれ壁状のオブジェが設置されました。その最終日のイベントがとても素晴らしくて、一方の壁は砕いて参加者に「形見分け」され、

んだよ」と伝えながら、記憶装置を維持し、更新する活動を続けていきたいんです。

卯城 なるほど、アーカイブまで踏まえてるんだ。そもそも「怒りの日」みたく日本の美術作品は寺などにあったしね。そんな「巡礼」が全国規模に広がったらめっちゃヤバイ(笑)。にしても、こういうオルタナティブな実践が今後必ず活発になっていく一方で、反比例するようにメインストリームがどんどん保守的になっていく。東京都現代美術館での「ここはだれの場所?」展での会田誠さんの作品撤去問題がいい例だけど、検閲や自粛が増えている。コマージュやギャラリーやマーケット、美術館やビエンナーレを中心とした今の環境を確立してきた会田さん世代の功績を考えると、すごくアイロニクな状況だよ。Chim!Pomも公的な機関による「フクシマ」

モノとしての保存だけじゃない、作品の生き方がある

—卯城



Profile

うしろ・りゅうた 2005年結成の6人組アート集団「Chim!Pom」のリーダー。06年初展「スーパー☆ラット」で注目を集め、国内外で活躍する。主な個展に13年「広島!!!!!!展」(旧日本銀行広島支店、広島)ほか。15年、アジア広域で活躍するアーティストを顕彰する「アルデンシャル・アイ・アワード」で、もっとも栄誉ある「Emerging Artist of the Year」を受賞。

「放射能」NGの要請はある展覧会で経験して、その理由は今の政治状況と密接に結びついていた。そんななかこの3つの独自の展覧会が福島で開催されたのは、マジで日本のパラダイムシフトを示唆していたと思う。